

「ファームレターノ」vol.16
2017年9月25日号（毎月発行）
発行／一般社団法人 自然食ねっと
デザイン／株式会社ナシカ
文・編集／石川千晶 写真／浦岡伸行



えんどう農園の情報を
映像でご覧いただけます。

ふるさと21株式会社 堂崎 巧

作物の栽培方法について

作物の栽培には有機JAS、自然農法、特別栽培など、方法により、さまざまな栽培認定があります。

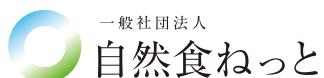
どの認定もとても素晴らしい規格の元に管理されていますが、生産者にとって、基準のひとつに過ぎないと考えています。

同じ有機JASの認定を受けていたとしても、生産者によって「地方のみで作物を育てたいから肥料を使用しない」

「さらにおいしくするために、有機肥料を使って良い作物を作るなど、考えは人それぞれです。栽培認定だけでは語りきれない生産者たちの個性やこだわりを私たちより多くの方々へ伝えていきたいと思います。



Endo Farm えんどう農園



〒250-0024 神奈川県小田原市根府川 549-3 TEL.0120-07-8313

◎自然食ねっと参加生産者の作物を地直送



*えんどう農園の商品は上記サイトでご購入いただけます。

土と創るむつ雪化粧（かぼちゃ）

幾多の苦難を笑顔で跳ね返す
遠藤柳太郎のおおらかさ



遠藤さんが「おつかあ」と頼りにする
後継者・西山節子さんと

むつ市・下北郡唯一の自然農法認定生産者

かぼちゃには大きく分けて「日本かぼちゃ」「西洋かぼちゃ」「ペポかぼちゃ」の3種類があり、糖質の多い「西洋かぼちゃ」が現在、大半を占めている。「冬至にかぼちゃを食べると風邪をひかない」といわれるよう、「β-カロテンやビタミン、ミネラル、食物繊維など栄養豊富な野菜だ。

白皮栗かぼちゃの一種で、甘みが強く、加熱するとほっくりする「雪化粧」は、スープ、天ぷら、煮物などに適している。でんぶん質が多く、少し固めで、貯蔵性が高く、冬至まで保存がきく。夜、気温が高いと養分が果実へ運搬されず、品質が劣化するため、冷涼な気候を好むという。青森県むつ市で、農薬や化学肥料を使わずに、自然農法の野菜を長年育てている遠藤柳太郎さん。広大な圃場にかぼちゃ、豆、芋、花など、多様な作物を作付けしている。

自然農法野菜のおいしさや安全性を広く知つてもらい、生産者や協力者が少しでも増えることを願いながら、81歳を迎えた遠藤さんは野菜や人を懐深く育て上げている。

えんどう農園の商品

雪化粧 自然農法無農薬かぼちゃ 5kg

※価格は時価。商品の詳細は「ふるさと21」サイト
(www.fsec.jp)をご覧ください。

えんどう農園 青森県むつ市大畑町松ノ木 56-1



*写真はイメージです。

ちやを植えたら、去年の倍の大きさに育ちました。同じ圃場でも、たつた何メートルか離れただけで全然違います。連作を避けて来年は場所を変え、何年かに1回、同じ場所にかぼちゃを植えます。



山に親しみ、自然農法へ

昭和40年4月から平成9年に定年退職するまで

31年間役場に勤めました。その前は営林署に勤めていたのですが、冬季は仕事がなく、失業保険をもらしながら、消防のボランティアとして1本10円で各家庭の煙突掃除をしていたこともあります。

退職する10年ほど前に家の裏に10坪ぐらいのハウスを用意しました。実家は宮城の米農家で、親が自給自足している後ろ姿を見て育ちました。そ

の当時は化学肥料などなく、自然農法が当たり前でした。自分も休日に山に入つて山菜やキノコをとり、木の葉を持ち帰つて、野菜作りに役立てて

いました。最初はトマトを作つたのですが、支柱を買えず、糸を利用しました。実がなると、ぐらぐら揺れ、トマトが酔つてしまふようでした。

有機栽培で3年ぐらいたところ、4～5年目に全然それなくなりました。先輩に尋ねると、「教えてくれるわけではなく、「自分で盗んで覚えるんだ」と言われ、圃場を見て研究しました。それでも有機栽培の大重要なポイントはきちんと教えてくれて、またとれるようになりました。

以上のお話を作ります。表皮が白く、見た目がきれいな雪化粧という名前の冬至かぼちは、もう20年以上前から露地で作っています。

圃場は全部で3箇所あつて、ここのお話は端から端まで1町歩くらい。そのうちの1反歩、300坪で雪化粧を栽培しています。畝は1本40メートル、株間50～70センチで苗がびっしり植わつていて、全部で1000個ぐらいあります。雑草は自然のままで、かぼちゃの葉つばも元気なので、どこに実があるかわからないでしょ。つるが黄色くなつたら収穫できます。今年はお盆に100個ほど出荷しました。9月でまだ半分もとつていませんが、10月の始め頃には全部収穫します。

今年は猿が出たので対策として畝2本をナイロントで養生したのが功を奏したのか、質のよい雪化粧がとれています。物を作るのは毎年勉強です。何年やつてもこれでわかつたということがありません。今年よくても来年も同じとは限らないのです。昨年は芋とカボチャを植えた場所が合わなかつたらしく、全然ダメでした。今年は芋の側にかぼ

野菜の種類を増やしています。以前は枝豆も作っていましたが、カモシカが若芽を食べてしまつて実なりません。きゅうりでもなんでも、柔らかい芽が大好きです。空にはカラス、地上にはネズミ、キツネ、タヌキ、カモシカ、猿、熊と、対策すべき相手が多いのが悩みの種です。ハウスになつてあるトマトをごつそり、人間に持つて行かれたこともありますよ。

野菜の種類を増やしています。以前は枝豆も作っていましたが、カモシカが若芽を食べてしまつて実なりません。きゅうりでもなんでも、柔らかい芽が大好きです。空にはカラス、地上にはネズミ、キツネ、タヌキ、カモシカ、猿、熊と、対策すべき相手が多いのが悩みの種です。ハウスになつてあるトマトをごつそり、人間に持つて行かれます。だからみんなに「ますます元気だ」と言われます。元気じゃなければやられません。来年82歳になりますが、この状況ではやめられません。

慣行農家のひとも農協とも仲よく、地域全体で取り組みたいですね。楽しまながら模索しながら新しくやることになつてるので人手が必要ですね。そもそも仕事を減らさなければならないのに、

歳がいつでも毎年1つか2つ、仕事の量が増えていきます。だからみんなに「ますます元気だ」と言います。だからみんなに「ますます元気だ」と言われます。元気じゃなければやられません。来年82歳になりますが、この状況ではやめられません。

慣行農家のひとも農協とも仲よく、地域全体で取り組みたいですね。楽しまながら模索しながら新しくやることになつてるので人手が必要ですね。そもそも仕事を減らさなければならないのに、

次世代へ技術をつなぐ

【えんどう農園 遠藤柳太郎さん】

オリンピックの青空に思ひを託して

同じ圃場でも土が全然違う



地元スーパーの信頼を獲得



最高のチームワークが花を咲かせる

えんどう農園では、お盆の出荷を目指して、アスター5色とトルコキキョウ4色を約2万5000本育てている。出荷の時期4～5日間は朝4時から夜10時まで立ちっぱなしで、10人がかりで収穫をする。色を混ぜて3本1組で3000ほどセットし、墓に備えるように用意する。今年は雨のなか、短期集中の闘いになった。

「寒くてトルコキキョウがお盆前に咲かなくて。生き物ですからね」と西山さん。3月10日、20日、4月中旬ごろと、3段階で種を植え、定植するのは西山さんの仕事だ。もともと多かった花の生産者が減り、市場で花を探し求める客が多いことに気づいた西山さんの提案で栽培することになったという。「花の時期になれば、何色の何をどこに植えるかというところから、おっかあがやってくれる。俺は網を張って管理するだけ、知らんぶりしていられるんです」と遠藤さんが笑う。出荷のタイミングをお盆前にあわせるのは大変だが、自然農法だから持ちもよく、年々売上を伸ばしている。



11月くらいまで色鮮やかに咲き誇る花たち

いま、スーパーへ搬入をしてくれている西山節子さんとのつきあいは11年前からです。立派な野菜から売れて見栄えが悪いのは残っていたのですが、西山さんは発想がよくなりました。大きな野菜は、カットすると単価が倍くらいになります。西山さんは発想がよく、すっかりあてにしています。彼女のようなら、すれたらと、後継者として頼もしく思っています。

我々が成功事例になつて次に続く人に見せられ

ます。百姓は皆そうだと思います。それがすごく楽しい。何か力になるものがあるから、やつてているのです。



柳澤やす子さん（中央）も力強い存在。

消費者からの要望に応え、

なくても顔を出すから長持ちします。売る場があるのは幸せなことです。